

□随想□

# 神戸・今昔

小山祐士  
え・津高和一



私の書いた戯曲で戦後神戸で公演されたのは、「蟹の町」「日本の幽霊」(二作とも俳優座)「日本の孤島」(文学座)と民芸上演の「泰山木の木の下で」と、先月の「瀬戸内海の子供ら」ぐらいであるが、私が初めて小山祐士の本名で発表した「十二月」という戯曲が、友田恭助、田村秋子が主宰していた築地座によって岸田国土の演出で関西学院の講堂で上演されたことがある。昭和八年の六月である。「十二月」は、「瀬戸内海の子供ら」の前の年に書いた作品で、「十二月」の公演が築地座としては最初の、第一回の地方公演(大阪の朝日会館でも公演)であった。東京公演の時は、久保田・里見弾共同演出による久保田万太郎作の「短夜」と一緒に上演されたが、関西公演の時は「短夜」に代って、作者演出による里見弾の「小暴君」と一緒に上演された。その公演はかなり好評を博し、その公演がきっかけとなって、築地座は大阪文楽座と提携公演を行なうことにな

り、神戸にいた中川龍一氏らによって、築地後援会が大阪に出来たりした。

拙作には、「神戸」という名前がよく出て来るが「十二月」という作品には、神戸の話がだいぶ出て来る。神戸の大きな造船所に勤めていた東大出の技術屋が、昭和五、六年に吹きまくった経済恐慌の渦に巻きこまれて、会社を首になり、家財や子供たちを神戸の、中山手の家に残したまま、夫婦で職さがしに上京して本郷で下宿屋を経営する話だからである。

昭和十五年に中央公論社から創刊された「新風」という文学雑誌に、私は、「言葉について」という題で、九頁ほどのエッセイを書いたことがあるが、そのなかでは、神戸言葉と瀬戸内海の或る地方の言葉を引用しながら「台詞」というものについて書いた。

「従姉妹たち」という女ばかりの戯曲の中でも

主役の二人は神戸言葉をつかう。

神戸言葉や昔の神戸の町が、私のなかに非常に印象深く残っているのは、物心がつく頃から、父や母たちについて、毎年二、三度は必ず神戸に行っていたし、中学校に入ってから、春休みと夏の休暇の幾日かは神戸で過していたからである。というの、いまはもう両方の店も潰れてしまったが、私の母のすぐ下の妹が元町三丁目の呉服屋に嫁に行っていたし、伯父が三宮で貿易商をやっていたからである。

私は、毎日元町三丁目と三宮の間を歩き来し、従兄弟たちとメリケン波止場に外国船を見に行ったり、買い出しに行く伯母たちについて南豆町に行ったり、時には伯父たちに支那料理を喰べに連れて行って貰ったりした。

元町の伯父の家では、雨が降っていないかぎり毎日、早朝に諏訪山に登る習慣があったので、私も毎朝諏訪山に登って展望台で海を眺めた。展望台に登る途中にある小さな祠の神前に或る日、三尺位の豚の丸焼きが供えてあるのを見たことがある。伯父によると、支那人が願をかける時には、豚の丸焼きを一匹そっくりお供えするらしい。時々、豚の丸焼きが供えてある。という話であった。百グラムの豚肉の値あがりを感じている今の人たちに信じられないような話であるが、伯父は別に驚いたような顔付きもしていなかった。そういう長閑な時代があったのである。私たちは時々、錨山や再度山に登ったこともあった。現在は、どうか知らないが、諏訪山、錨山、再度山といった山々のなかには、六七箇所の山茶屋が散在していて、町の人たちの間には、保健とか散歩の目的で、真

冬でも夜明け前から毎朝そうした裏山に登って、登山者の倶楽部のようになっている山茶屋で休んで帰る習慣があったらしい。夜明けと同時に起き出して諏訪山に登って朝もやで煙った港を見るのが、子供の頃の私には、神戸に行く楽しみのひとつであった。その頃の元町には、着飾ったいろんな外国人が歩いていた。そんな外国人を見るのも楽しみのひとつであった。そして南京町の支那料理屋に連れて行って貰うことと、中学生になつてからは宝塚に行くことが。

東京の大学に入ってから、夏・冬・春の休暇で郷里の福山に帰る度に、東京に戻って来る時には、必ず神戸に寄って中山手の伯父の家で何日かを過ごして、時々諏訪山にも登った。が、もうその頃には、朝の諏訪山に登ることよりも、元町の喫茶店でおいしいコーヒーを飲んだり、上級生になるにつれて、三宮あたりの、外国美人のいた小さなバーのほうが好きになっていた。

瀬戸内海方面に取材旅行に行った帰りに下車したり、劇団について行ったり、最近でも、年に一、二度は神戸に行くが、諏訪山や再度山は、もう汽車の窓から懐しく眺めるだけの感じで、昨今は、もっぱら、三宮界限のごたごたした夜の裏町を酔歩している。おでんやのハシゴである。そのハシゴの初まりか、途中に、元町の蛸の壺に寄ることになっている。蛸の壺で飲んでみると、神戸に来ていという実感が湧いて来るので、自分でも奇妙なことだと思っている。神戸は私には思い出の町であり、尾道・京都と一緒に、私の一番好きな町である。

□随想□

# 第二の ふるさと

田中千代  
え・津高和一

神戸は私の第二のふるさとでもいいでしょうが、仕事の誕生地です。そして私の仕事を今までに育ててくれた温かいゆりかごでもあったわけです、神戸という言葉を聞いただけで、自分の仕事の赤ちゃん時代、幼稚園、小学校と、その年輪が頭の中に浮かんでくる程なつかしく思われます。

生まれたのは東京、大人になったのも東京ですが、仕事が生れて、仕事が大人になったのは神戸です。私はこの二つのふるさとをもつことが出来て、今本当に幸だと思っています。東京、神戸、

両方の街に足を一本ずつふみつけて立っているような気持ちです。また、私には神戸は別の意味でなつかしい数々の思い出をよびかけてくれる港でもあります。外交官だった父母をもった私は、両親が海外に転任しまた帰国する度に、この神戸の

港に行ったものです。当時はホテルもなく、西村旅館という宿屋が元町にありました。亡くなられた西村雅貫氏がいられた宿ですが、祖母にとりもなわたりして、よく私はそこにとまったものです。その窓から見下す神戸港、そして海外から船が港に入ってくるのを、それに両親が乗っていると考えて、どんなにまちわびて港を眺めたでしょう。か。今思い出すと「マダム・バタフライ」がある晴れた日に窓から船の入港するのを待ちわびている光景が思い出される程です。

何時も新しく祖母が作ってくれた友禅のきもの等着で、久し振りの両親の面会を胸おどらせてまわっていたのも、神戸でした。外国で生れた弟や、またある時は海外で生れた初めて会う妹が帰ってきたりしました。日本を知らない、こうした弟妹



カ



は、また新しいお伽の国に着くような気持ちで船をおりたものでした。何んでも珍しく、靴をはいたまま西村旅館にかけ上がり、あたりを見まわして、ソファーと思ったのか、床の間にチョコンと腰をかけてしまったことは、迎えに来た人達を笑わせたものでした。

そんな弟も、今は国連大使となって働いている姿を思い出すと、五十年の年月はこんなにも世界を変化させ、また、私達も年をとったものだと、考えざるを得ません。西村雅貴氏が、戦後クラブを建てられ、そこに講演に行ったり、ききに行ったり、郷土を愛する人達の集まりの場になっていた頃、私もよく出入りして、なつかしい皆様達に会ったものです。そして遂には私自身が神戸港から出発したり、帰ったりする身になってしまいました。六畳の食堂のテーブルで六人の友達と洋裁のグループを始めたのが、そもそもの私の学校の卵でした。その六人が今では東京の学校も合せて五千人を越える程に成長をしました。この陰には、神戸の皆様のご温かい愛情と、ご協力があつたからこそと、いま、この原稿を書きながら、神戸の街そして神戸の皆様にお礼をお送りする気持ちでいっぱいです。元町に出来たカネボウの店で、初めて店の仕事をしたり、雪が六甲の山に積ると、朝五時には早や友達から電話で起こされ、六甲には雪が何層位ありそうだから早速出かけようといったさそいがかかってきたものです。

何時も準備のととのっている私は、早速スキーをはいて、六甲までかけつけ、ロープウェイで上まで上り、今の表ドライブウェイを、ロープウェイ

ーの出発点迄滑りながら、それを二、三回すると、雪もとけてしまふといった、雪のとけぬ間のしばしのスキーのスリルを味わったのも、あの六甲です。こうして、カネボウのおつとめに、またグループの洋裁にと、ただちにとりかかるといふ若き良き時代を味あわしてくれたのもあの山です。

海と山にめぐまれ、犬を連れての散歩、お弁当をもって子供を連れてのハイキング等々、若い仕事時代の裏に、そのエネルギーと休息がその自然によって与えられました。

東京と神戸を十五時間と十六時間もかかって寝台列車、特急が出来て八時間半、遂に新幹線の超特急三時間十分、そして飛行機の四十五分と、五十年の旅の歴史も味わいました。

食物も、外人の多い神戸では、デリカテッセンのソーセージ、チーズ、ドンクのパン、そしておいしい中国料理、灘のお酒、新しいお魚、味覚の上でも日本一といっても良い程、味を楽しませてくれたところです。

日本中に数多くの街がありますが、神戸という所は全く日本に一つしかない国際的で、多様性をもつ不思議な街で、その中に独特の情緒をもっています。一時は飛行機時代全盛で港というものは影薄い気持ちでしたが、またかえって本当の旅を楽しむ人は船を利用するようになり、神戸港の新しい生命が、また開かれることでしょう。一度、昔思ひもよらなかった大きな豪華船で、静かに入港してみたい気持ちです。ジェットのスビードとは正反対の欲望もまた人間には不思議とあるものです。百年の歴史を土台にし現代に生きる港として、新しい発展をねがわずにはおられません。

△服飾デザイナーV

## □随想□

# 神戸の詩人たち

## 伊藤信吉

二月下旬のおだやかな夕暮れ。私は暮れてゆく神戸港の岸壁に立って、港に碇泊している汽船の灯をみていた。それらの汽船の現代の城——ビルを海に浮かべたようなものだ。その岸壁でライターの火をつけて「おや」とおもった。炎が青く透明にうつくしいのだ。微かな潮風をうけると、ライターの火は青く透明になるのだろうか。

どこの港でもそうだが、汽船の出入りはなんとなくエキゾチックな気持ちにさそう。まして船室のあかるい灯は童話的だ。私は老人だから、あの汽船はどこへ行くのだろうかなどと未知の世界を想像することはしないが、それでも港には「異国」めいたものがある。だが異国はさまだ。二万トンのイギリス観光船も異国だし、ベトナム行の貨物船だって異国だ。そういう国際的な入り混じりをおもわぬわけにはゆかないし、ベトナム号に目をむけても、「異国」的だとか「童話」的だとかいう、そんな他愛ない情緒はけし飛んでしまう。私に神戸港を語ることはできない。

神戸の町ということから、私の思いに浮かんできるのは昔の「海港詩人倶楽部」の詩人たちである。そのグループの雑誌『羅針B』である。同人は誰々だったろう。おぼえてるのは竹中郁、福

原清の二人だが、私の手もとにはその雑誌もない。竹中郁には大阪で会ったことがあるが、福原清についてはなんの知識もない。その詩集も持っていない。

悲しげに海鷗が啼く

灰いろの翼をひるがへして

荒い波にさからって

きびしい一つの意志が飛ぶ

みよみよ

飛沫に濡れる翼

なほも高き浪を超へて

遠く小さく

へんべんと

いかに軽く翔けるかよ。

これは福原清の「浪を超へて」の部分である。私はこの詩が好きだ。灰色の翼。その飛翔に寓意したもの、の重さにもかかわらず、浪のひるがえるような変転のリズムが私をひきつける。

詩集を持っていないのに、どうしてその作品を引例することができたかという、これを私は福原清詩集『月の出』（大正十三年十月刊）に寄せた萩原朔太郎の序文から借りた。私は萩原朔太郎のその序文の写しを持っているのだ。この詩人について萩原朔太郎は「仏蘭西風の象徴詩にみるところの、あの黄色い花粉のやうなデリケシイと、凋れたばらのやうな貴族生活のアンニュイと、すべてさういった情操を、この詩集の著者に於て見ることが出来る」といっている。福原清はこういう作風の詩人といってよいだろうが、ここにみた



「浪を超へて」については「果然、ここには観念詩派への傾流が現われてきた」といつている。

こんなふうに私には、萩原朔太郎の序文を通してしか言うことができないが、この詩のテーマは作者が神戸に住んでいたことによって可能だったのである。大正十三年（一九二四）といえばずいぶん遠いことだ。そのころの神戸港はもつと小さかったろう。その港の空にひるがえる鷗の姿に、作者は自分の「一つの意志」を寓意したのである。

神戸にかかわりのあるもう一人の詩人は八木重吉である。この詩人は東京の豊多摩に生まれ、詩人たちとの往来もなかったため、神戸に住んでいたことさえほとんど知られていない。基督者だったこの詩人はひっそりと二十九年の生涯を過したが、大正十年から同十四年（一九二一―二五）にいたる満四十年の神戸暮らしの日々も、やはりひっそりとした生活だったのだろう。

# 冬のはじめ

屋上庭園のうへからみる

神戸の街の

妙によそよそしい

そのくせひとすぢのたちがたいあくがれの

にじんだ顔

山のはうだけは

秋ばれのやうにすみきってあかるい

たかいところからみるゆゑだらうか

まやまやとたちのぼるむすうけむりのいた

ましさ

いちやうに

くすんだはがねいろの街のいろどり  
ざつ然としたそのすがたは  
整然としたひとすぢの悲しみとなつてつん  
ざいてくる

ここに四十余年前の神戸の風景があるが、この詩も八木重吉の性格をうつしてひっそりとしている。立ちのぼる工場の煤煙を「まやまや」と形容してあるが、これはたぶん「濛々」のことだろう。

「まやまや」という形容は語感がおだやかで、詩ぜんたいがひっそりとしている。冬の日の冷たさに触れるような悲しみさえひそめた詩である。

その四年間を八木重吉は御影中学校の教職にあつた。住居が何町だったかを私は知らない。いかにひっそりとした人格でも、神戸住まいのあいだに、八木重吉は当時の繁華街元町のあたりを散策したろう。この詩にいう「屋上庭園」もデパートのそれであつたろう。

神戸の街の発展の規模からすれば、八木重吉のこの詩はほんの小さな断片にしか過ぎない。しかし四十数年前の神戸を描いた詩は、八木重吉のこの一篇だけではないだろうか。いまの人口百三万近い町にくらべて、その当時の神戸はずっと小さかつたろう。そのことはこの詩からもうかがわれる。三宮の繁華街は現代都市の象徴といつてよいが、八木重吉が住んでいたころは、地下街など想像もできなかったろう。私は六甲の中腹あたりで、燈火の見事な夜の市街を眺めながら、過ぎた日の詩人たちのことをおもっていた。詩人の運命も燈火に似て、私どもの記憶の中に明滅するかのようだ……。

△詩人▽

鉄板焼

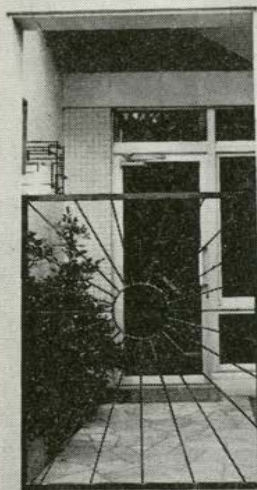
# 月

KOBE BEEFの

美味しさを たっぷりノ

KOBE IKUTASUJI

<33> 7509



BAR ★ KOBE IKUTASUJI <33> 0886

## Moon Light

CLUB ★ KOBE IKUTASUJI <33> 0157

三宮店・阪急神戸駅西口前  
TEL神戸(078)-33-0381



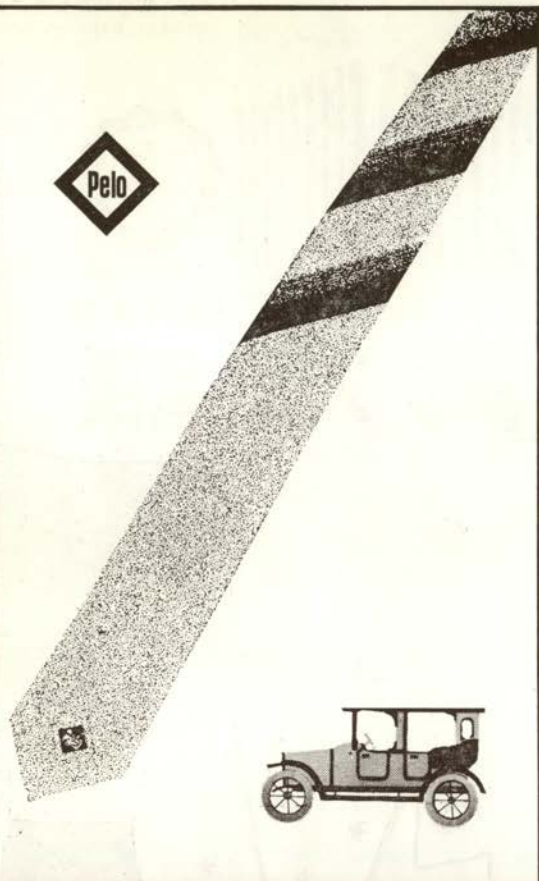
お菓子の  
コトブキ

# 寿本舗

*Kotobuki  
Confectionery*







日本販売元

**元町バザー**

神戸×元町1丁目 TEL (33) 1401・7031

東京×日本橋×白木屋



**O-SHIBATA**



**柴田音吉洋服店**

神戸・元町通4丁目 神戸 34 0693

大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106





□宮地襄二氏

★神戸っ子対談

# 無限の可能性を秘める神戸

宮地襄二 〈宮地汽船社長・神戸経済同友会代表幹事〉

角南猛夫 〈角南商事KK社長〉

神戸港開港百年を記念して、今月の神戸っ子対談は、神戸財界の新しい時代をつくる人たちである、宮地襄二氏と角南猛夫氏をむかえて開港百年をどう受けとめるかということ、経済同友会の問題などについてお話し合っていた。

## ★開港百年はコンテナ時代の転機

宮地 私はもともと田姓だね。ハタレント田 英夫氏とはいとこになるV学習院大学に在学中はトランペットをやってまして、当時は南里文雄、田 襄二と、トランペ

ットの三傑といわれましたね。その後、昭和二十一年にこちらにきまして、宮地の養子になったんですが、ちょうど終戦の翌年だね、神戸に着いたのが三月三十日なんです。その夜、風邪をひいて寝てて五人組の強盗に入られた(笑)。これがぼくの神戸っ子第一日目ですワ。手足を縛られてしまっただけ(爆笑)。

角南 私は純粹の神戸っ子なんです。曾祖父の時代に明治維新をむかえて、俗にいう士族の商法をはじめて失敗しているんです。現在の仕事は父が初めましてね、私で二代目です。もとは兵庫で商売をやったんです。昔の

神戸の中心は兵庫の方でしたが、最近経済の中心が東の方へ移りましたねえ。ショッピングでも元町よりセンター街の方が人が多くなったようですね。戦前は「元ブラ」といって元町が多かったんですが……。あの街並は昔の東海道そのままの道筋らしいですね。百年前は松並木に海が見え、二ツ茶屋と称するお茶屋があったそうです。神戸はもともと輪田の泊として栄えた港ですから、今さら百年はおかしいじゃないか、という説もあるんですよ。もっとも、近代的な港として出発したのは井伊直弼の開港以来ですけれどもね。

そして、第一次世界大戦当時に非常な船ブームがきて神戸が股賑をきわめた。それが戦後、東京に中心が移って戦争を境にしてコロッと地図が変わってしまった。

**宮地** それは企業として神戸を見た場合の話で、港の実力はやっぱり変わりはないと思いますね。おそらく、輸出は日本第一でしょうしねえ。

**角南** 今度はコンテナ基地ができますね。これはやはり私らのような門外漢からみましても、ひとつの輸出の大革命という気がするんです。そうしてみると、神戸が流通のセンターのような格好になってくる。それには道路が発達しなければならぬですね。開港百年というのは好機に、コンテナ時代という転機をむかえて、神戸はやはり港を中心にして繁栄しなければならぬと感じますねえ。

**宮地** そうですよ。神戸港は天然の良港ですからね。山が近く、海は深い。かといって、あまりに深すぎるということもないですからね。いい港です。大阪港がいくら頑張っても港の資質という面では無理ですよ。これだけはいくら土木作業が発達しても人工ではできませんからね。

**角南** だから明石架橋ができ、裏六甲が開発されて神戸の入口が広くなると神戸は海上輸送のセンターでもあり陸上輸送の要にもなる。隣接した道路網に接続して、陸揚げしたものが大阪方面へゆくとか、できあがった製品をコンテナに積みこんで外国へ輸出する。そういう輸送

の大型化の時代に入るんじゃないですかね。

**宮地** たしかにコンテナはひとつの輸送革命です。それがちょうど開港百年にぶつかったというのは面白いと思うなあ。そういう意味で原口市長のアイデアは面白い。たとえば、ポート・アイランドの考え方にしても市長は「港というものはいくら金をかけてもできるものではないし天然自然の問題でもある。その整備には大変に金がかかる。どこもかしこも作らんで、神戸港を集散地として外航と内航の接続点として活用すべきだ」というんです。これは神戸の人間だからいうんじゃないに、日本全体の経済から考えて、実にいい着想だと思いますね。

とにかく、今は荷役のスビードが進んできて、そのスビード・アップというのは大きな問題になっている。

**角南** 前にロリタリーの会合でコンテナの映画を見たんですが、あの速さで荷役すれば係船代も何分の一かのコストで済むでしょう。

**宮地** 現在はコストが少々高くついても、長い目でみればプラスになりますね。ただ、陸上輸送が大変でしょう。大体20トンくらいあるでしょう。普通の道路では角が曲れないだろうね。

**角南** 道路問題ですね。今の状態では無理ではないですかねえ。

### ★神戸経済同友会の方向を考える

**角南** 今年で昭和も四十二年でJCA青年会議所Vの方もととうとう大正生れのものがいなくなりまして、宮地さんなどの昭和生れの人たちが神戸の発展のために思い切った発言をしていただいたいと思うんです。そういう意味からいっても、今度、宮地さんが経済同友会の代表幹事に再任されたのはわれわれとしても嬉しいんです。が、同友会というのは敗戦のショックの中から、若い経営者が大御所に物申す団体として生れた。と、聞いているんですが、その頃に若かった方々が既に六十をこえられて、各種の経済団体の役員を兼務されています。そうします





□角南猛夫氏

と、本来の同友会の趣旨が見失われて、一種の社交団体的な要素が強くなっている、と思うんです。

宮地 しかし、弁護するわけではないけれど同友会に出てこられる方は、年配の方でもいわれることは若いですよ。だから、逆に年配の人があまり年を召されぬよう、同友会を若返りのための場として大いに利用していただいたら良いと思いますよ。

同友会というのは「同憂会」という精神からきているんです。だから実行する団体ではない。しかし、ぼくは精神論は結構だけれど、現在では何か理論ばかり先走っているように思うんです。もっと一般の人が聞いても分るような具体的な問題を提起すべきではないか、という感じをもっているんです。例えば、ポート・オーソリティの問題にしてもあれは新聞の社会面に載ったんです。社会面にのるということは、皆さんが読まれるということですよ。それが、われわれの本当にいいたいことは、港の管理と経営はどうするか、ということだった。

ところが、防波堤ができると堺まで何分でゆけるようになるということがつけ足してあった。すると、うちの運転手などが「よその運転手がひどく喜こんでいました

よ。これからは堺までゆくのもいき易くなる……ってねどうか頑張ってください。」（笑）と、すり変ってしまうんです。もっとも、ポート・オーソリティということ自体は広く皆さんに知っていただきましたけれどもねえ。

だから、同じことをいうのでも皆さんが読まれるような記事になるように問題を提起するというのも必要ではないかと思えますね。ただ、同友会の性質として、ひとつの個人的な集まりですからね。あまり具体的な問題を出すと尻切れトンボになって無責任になるという心配がありますね。ポート・オーソリティの構想にしても、ずいぶん叱られましたよ。「なんだ、お前、尻切れトンボじゃないか」ってね。（笑）ひとつの段階があるんです。それをどこかで引継ぎすれば良いんですがね。

角南 そういう意味では経済四団体がお互いに横の連絡を緊密にとっていただきたいですねえ。共通のメンバーの方が多いことですしね。

宮地 それは、こんど神戸でJCを加えた四団体が話し合いの場をもつようになったでしょう。あれは具体的な問題をとりあげますでしょう、だから良いですね。

角南 われわれには同友会で勉強させてもらう、という

氣持が強いでしたからね。基幹産業のトップマネージメントの方々にいろいろと教えをいただく場として、また年が若いということは経験の面でも、未だしの念がありますから、後輩の指導という意味をかねて大いに若い者の場にも出ていただきたいですね。どうも神戸に居る企業がやはり、神戸の経済界にもう少し力を入れて、中央に対しても力のある人が同友会でも発言し、もっともって活躍して欲しいということが望ましいですね。

**宮地** 今までは一般的にいつて、神戸に本社をおく大企業の方々と同友会との縁が薄かったという気はします。やはり、むつかしい話ばかりではなしに、ときには酒を飲んで馬鹿話しても、何かあったときには話ができるという下地は作っておくべきですね。年令差があればあるほど、そういう縦の線が必要ですからね。神戸はそういう所が欠けていましたね。

## ★ちようど頃合いの港都

**角南** 私は仕事の関係から川崎製鉄、重工などを初めてする神戸の企業の、重要な役割というものを感しているんですかね。

私の少年時代は軍艦建造時代で、軍艦、航空母艦などをずいぶん造っていました。そういう時代に育って、終戦をむかえ、戦後の計画造船時代というものになった。そして、現在は戦争には関係のない時代です。まあ、敵密には防衛庁の小型潜水艦、駆逐艦などがありますけれどね。それで「港と神戸」ということもさることながら、「造船と神戸」「鉄鋼と神戸」という面からみましても、百年の間に技術革新は進んだし、百年は大節という気持が強いですね。これを区切りにして、神戸の企業がその地方で大きく発展して欲しいという期待はありますね。

**宮地** 船の場合は、今まで長い間に大きな変化はないんですね。ですから中古船を買っても、結構、やっていけるというのが船なんです。それが最近では急に、船の方も変わってきましたね。他の産業なみになってきた。

全般に大型化、能率化ということがいわれ、乗組員の数も減ってきましたね。むかしの軍艦の造船技術は大変に高度なものだったらしくて、現在、日本の造船が世界に冠たるのも、軍艦建造を母体とした造船技術が支えになっていると思うんですよ。

**角南** とくに溶接技術では世界最高のものをもっているというのは素晴らしいことですね。戦争というのは大きな罪悪ではあったけれども、ある面からみれば技術革新に役立った。ということはいえますね。

**宮地** これは、根本問題だと思うんですがね。一時、神戸は斜陽の都市だとか、神戸に財界ありや否やとかいわれましたが、私は決してそうは思いませんな。

それは、それぞれの経済の大きさというものはあります。でも、東京、大阪に較べて神戸が数字的に小さいからといって卑下することはありませんし、妙な競争心を出さなくても良いと思う。神戸には神戸の良いところがあるんですから、それを伸ばしてゆけばよいと思いますよ。また、逆に自信過剰になって、ほかの都市との協調を乱しても伸びないしね。やりようによっては非常に面白い大きな都会ですよ、神戸は。

**角南** 気候はよし、食べ物も美味しく住みよい都市でもありますし、港を中心とした神戸の企業が大きく発展していった街ですから、裏六甲の開発、架橋で四国、中国と直結するということになりますと面白いですし、まだまだ発展する余地は充分にあると思います。

**宮地** やはり神戸っ子は個人個人があんまり恵まれませんごているから、全体にお坊ちゃんですよ。交際は上手だけれど、大阪の商人の根性と名古屋人のバイタリティというものを感じられない。スマートすぎますよ。

**角南** そういう面で、他所へ出て神戸を客観的にみて、恵まれた環境におぼれないよう、大いに神戸を中心にして活躍して欲しいですね。各自の企業が発展するということは、神戸が発展するということからね。



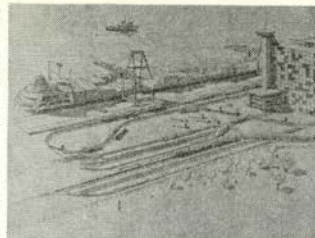
## 経済ポケット

### ジャーナル

#### ★売り込みめねらう

##### 立体コンテナヤード

銭湯の脱衣箱のような「立体コンテナヤード」が川崎重工、川崎汽船の間で検討されている。立体コンテナヤードは米国カイザー社のアイデア。鋼鉄のたなをビルのように組み立て、この空間にコンテナを入れ移



立体コンテナ基地

動エレベーターで上げおろしするもので、狭い用地しかない日本にはもってこないカになったコンテナを積み重ねたコンテナヤードは神戸市では摩耶ふ頭に六十万平方メートルを予定しているが、米国でも最近はその場所をとる野積みより立体式の方が効率がいいとの考え方が出てきた



という。近くカイザー社の副社長が来神、神戸市当局に説明するといひ、コンテナ基地となる摩耶ふ頭やポートアイランドに採用される公算もある。

建設費は十五段積みで五十億円かかるのですが、川重ではカイザー社と技術提携を予定、各方面への売り込みをねらっている。

#### ★浮かぶ実習船を計画

摩耶ふ頭に港灣センター  
今秋北米・太平洋航路のコンテナ専用船を迎える神戸港摩耶ふ頭に四月から港灣労働センターづくりが始まる。全国のモデルとして建設される港灣労働者の訓練学校には「浮かぶ実習船」が同ふ頭岸壁に検討されているほか、神戸市ではコンテナ時代の新しい港灣荷役技術の修得してもらうためのいろいろな準備を進めている。

神戸市は労働省、雇用促進事業団の協力で新年度から摩耶ふ頭の基約九千平方メートルに四階建ての港灣労働者福祉センター、港灣労働

者訓練学校を建設するのをはじめ、港灣職業安定所、労基局分室も集めた港灣総合センターづくりに着手することになった。

訓練学校は姉妹港提携を結ぶロッテルダムのがそれが理想。三千三百平方メートルに教室と荷役機械を備えた実習広場のほか、広い海上を利用するのがミソ。同ふ頭基

部東岸壁に係留されている「進徳丸」(元神戸商船大が移転保存されることになったので、この跡へ中古船か本船のハッチひとつを浮かべて本番さながらの荷役実習をしようというもの。

#### ★赤字の日韓定期航路

##### 関西汽船もタウン

関西汽船の韓国定期航路が赤字のため休航している。同社の韓国定期航路は三十八年十一月から大韓海運公社(韓国の国策会社)九州郵船と並び毎週二便でスタート、これまでの航海でたまった赤字は一航海につき百万円、合わせて約一

億五千万円ナリ。現状では業績向上も望めず二月から貨客船「なにわ丸」(八〇〇総トン、旅客百五十二人収容)の就航を「当分の間」見合わせることにしたものの。

同定期航路ではすでに九州郵船が脱落、神戸ー韓国を結ぶ定期便は大韓海運の「ありらん号」(九七七〇総トン、旅客二百七十八人収容)だけとなった。関西汽船では当初、かなりの赤字を覚悟してなにわ丸を就航させ、日韓国交正常化のあと六十数万という在日韓国人の盛んな渡航、賠償物資の輸送などに大きな期待をかけた。だが韓国のドル不足、海外渡航制限など「お国の事情」が重なってすっかりあてはずれ。そのうえビジネススマンは大阪から韓国へ五等六十ドル、一等A船便は特等六十ドル、一等A四十五ドル、同B三十ドル、二等二十ドルで行ける飛行機を利用する時勢。「なにわ丸」の休航は長引きそうだ。

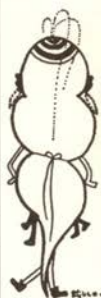
#### \*KOBEOフィスレテイ\*



奥井陽子さん(19)  
川崎製鉄本社総務部庶務課勤務

入社して1年。目下仕事に夢中だそうである。高校時代にバスケットボール部に籍を置き、校内卓球大会では女子で1位になったこともあるなどスポーツウーマン。6人兄姉の末っ子であまただともいうが、なかなかしゃべっている。趣味は手芸。20歳になるとミシンを買ってもらうことになっているので洋裁の勉強をしたいとのこと。長田高校卒。

# ☆神戸の集いから



## ★小山牧子「作家賞」受賞記念の集い

本誌に異人館物語を連載中の小山牧子さんが、名古屋の小谷剛氏主宰の「作家賞」を受けたことはお知らせした。受賞を記念して小山さんの所属する「自我」の同人、友人が集まってささやかな小山牧子を励ます会を開いた。

神戸新聞文芸部の伊藤誠氏の司会で初まったこの会は新人小山さんを解剖し、叱り、励ます言葉がのべられ、まだ独身の小山さんにこれを機



会にムコさがしをしようということになった。

小山さんは「もらった賞が同人誌の賞であるということがとても嬉しい。これからも地方で文字を地道にやりたい。それから今年は結婚もして」と恥かしそうだがきっぱりと語った。

## ★意気さかに行われた

一九六七日米合同アラスカ登山隊  
歓送会

県政百年、開港百年を記念してお

こなわれる「一九六七日米合同アラスカ登山隊」観送会が、去る二月二十七日オリエンタルホテル桜の間でおこなわれた。この登山隊はアラスカの未踏峰（四、四〇二米）の登頂を目指すもので、日本側が兵庫県山岳連盟、神戸新聞社主催、県と市ほか八団体が後援、アメリカワシントン州シアトル市の山岳団体「ザ・マウンテンアーズ」と合同で姉妹県市親善登山をねらった。会場では主催者を代表して山本吉之助氏（兵庫県山岳連盟副会長）が協力を感謝してあいさつ。くれぐれも隊員の健康留意を望んだ。そのあと田中寛次神戸新聞社長があいさつ。引き続き宮崎辰雄団長（神戸市助役）、津田周二隊長（兵庫県山岳連盟会長）以下十

四名の隊員が紹介された。海の女王田村美智子さんが振袖姿も美しく、花束を贈呈し、初登頂の成功を祈って乾杯したあと、和気あいあいなパーティーの雰囲気を楽しんだ。

この日、会場にはアメリカ領事、副領事をはじめとして大西雄一（神戸市商工局長）、勝山義雄（アラスカ州政府事務所々長代理）、岡部誠一（そごう神戸店長）、尾崎宏（日本山岳協会副会長）氏などが姿を見せていた。







洋服の粹

渡邊

品質のよい皮  
あきのこないデザイン  
きたえた技術がさえる  
ヨシオカの靴



★靴のオーダーメイド

**ヨシオカ**

神戸大丸前・33-5190  
33-9763



### 春のチャンパー

スエター  
コットン・パンツ  
スニーカー  
それに  
チャンパー

これで  
キミの  
春のお酒落が  
始まりました。  
色・ベージュ・赤・  
ブルー・オリーブ・黄  
¥ 2,900—¥ 3,200

若人の服飾〈マック〉



# MAC

★三宮本店／神戸センター街 ☎0895 ★トアロード店／セ  
ンター街西口 ☎0896 ★新開地店／新開地本通り ☎7688  
★姫路店★京都店

"THEY'RE  
SO-O-O-O  
BEAUTIFUL...  
I had to  
have both"



あなたの魅力を  
—そうひきたたせる  
おしゃれな Sun glasses

★ドイツ・アメリカ・イタリアのトップモード  
が揃いました。

★最新型〈ドイツ製〉加工機械によるスピード  
アップと強度な近視のめだたないすり方が  
できます。

## 服部メガネ店

大丸前 TEL (33) 1123



# パイオニア神戸

4



## 川崎正蔵

小川 誠

日本の造船業は最近十一年間その受注量、進水量において世界のトップに立ち、日本経済の大きな成長力の源<sup>もと</sup>になっている。神戸に育ち、神戸で造船業をはじめた川崎正蔵（川崎重工の創始者）は日本の造船業のパイオニアであり、造船の歴史はすべてここからはじまる。

川崎正蔵は天保八年（一八三七）七月十日、桜島を望む鹿児島<sup>さつ</sup>島の城下町に生れた。天保年間といえ、全国的に飢饉と疫病が相次ぎ、死者数十万と史書にしろされている。封建時代が激しく動揺し、それが新しい社会への原動力となろうとした天保の時代が正蔵の幼年期であった。

嘉永六年（一八五三）、十七才の正蔵は意を決して長崎に出た。時あたかも米国使節ベリ<sup>ペリ</sup>ーが浦賀に来航して世情は騒然としていた。正蔵はこれまで異人を相手に商談したことなどはなかったし、まとまった資本とでもなかった。彼は「オランダ館」からわずかばかりの商品を仕入れ、それを神戸、大阪などに送って商いすることから出発した。正蔵は商いの関係で長崎↓鹿児島、鹿児

島↓大阪を海路でしばしば往復したが、好んで洋型船を選び乗船するのが常であった。当時、木造の大きな和船が多かったが少数ながら洋型船は船腹が広く、船脚は早く、しかも安定性があるので、彼はわが国にも近い将来、必ず洋型船の時代が訪れると確信をもつようになり洋型船への関心は次第に深くなっていった。

正蔵は生涯のうちで三度死に直面している。慶応二年（一八六六）の山口県上ノ関の剣難、明治二年（一八六七）の土佐沖の海難、同五年の天草灘の海難がそれである。特に明治二年九月、鹿児島への船旅のときには、土佐沖で疾風・激浪に八時間余も翻弄され、船は沈没に瀕した。風浪がようやく収まったのちも、浸水したままの船は、月明りの海を急潮にのって南に漂流すること三十数時間。幸いにも種子島付近で救助され、九死に一生を得た。正蔵はこれもひとえに洋型船の賜物であると考え、この生還こそ、「船造りをもって終生のわざとせよ」との神の啓示であると解した。

さらに明治五年（一八七二）、天草灘における海難で

辛じて生命を全うするにおよんで、造船事業への意志は不動のものとなった。開業までの準備に数年を見込んだのは、資金・用地などの調達が可能ならぬ問題であったからである。当時、和船の船大工は多かったが、洋型船の造船技師は容易に得られなかった。その方面の有能な技師を得るためにも、彼は東奔西走した。

正蔵は商いを営んでいる間に「造船創業」の意図はますます燃えていった。ひと筋に「造船ことはじめ」への用意をすすめていたが、未知の世界に挑む企てであるだけに、創業の体制を整えることは容易ではなかった。ようやく機熟して、明治十一年（一八七八）四月、東京築地の官有地を借り受けて、川崎造船所を創業するまでにこぎつけた。小規模だが正蔵の長い夢はついに現実となった。ここに至るまでの正蔵の努力は並々ではなかったが、官有地の借用を許されたことは、後年かれを大成させた幸運の前ぶれであった。

造船所としての形態を一応整えて開業したもの、海運業者のうちには、洋型船の建造を歓迎しない向きが少なくなかった。そのおもな理由は船価高であり、また偏狭な国粹主義も影響していた。正蔵は船主の集まる会合にしばしば出席してもらっては国家的な立場から洋型船

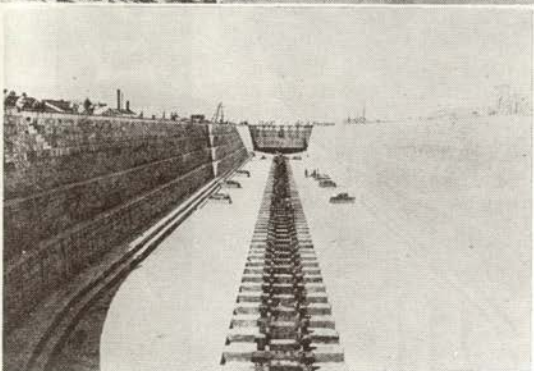
の必要を訴えた。また洋型船の安全・快速・有利を誠意をこめて説き、建造費の年払いや月払いによる造船契約を提案した。これが海運業者にうけて、洋型船の受注がしだいに増してきた。

正蔵が東京築地に、政府所有地を貸与されたのは、「洋型船建造奨励」という国策にもよるものであった。第一船「北海丸」の竣工によって、世に広く名を知られるに至った正蔵には、兵庫にも造船を……との意欲が強く動いてきた。彼は熟慮を重ね、案を練り、東京と兵庫とで相呼応して船造りに挺身する決心をしたのである。

明治十四年（一八八一）、兵庫県摂津国神戸区東出町（現在の神戸市兵庫区東出町）に川崎兵庫造船所を開設した。貿易の中心であり、出船・入船に賑う兵庫が、造船業に恰好の地であると考えた正蔵の着眼は誤っていないかった。しかし、東京と兵庫に、遠く離れて事業所を持ったために間もなく金融に行き詰まり、川崎兵庫造船所は欠損の連続であった。

経営の苦渋にあえいでいるとき、積荷を満載した正蔵の持ち船「竜王丸」「竜田丸」の二隻は暴風雨のため、前後して和歌山沖、および静岡県の沖合いで沈没した。持ち船二隻と積荷との喪失による莫大な損害は、正蔵に

上 明治24年当時の川崎造船所  
中 明治35年に完成した第一ドック  
下 明治19年当時に出された新聞広告



**川崎造船所廣告**

本所新造  
蒸氣風帆  
蒸氣機械  
新製

右は操舵人員兼司庫員に御座る川崎正蔵の  
のちも精々廉價に相成り都く御便宜  
可仕候間何卒御請願注文の程承上候  
也

十九年 月 日  
川崎正蔵





徳光院を見せるまいざた寂閑な山引布

とって致命的な打撃であった。しかし、彼はこの傷手にも屈せず、受注船の工程を崩さぬように心をくばり、注文主との連絡などはおろそかにしなかった。

経営難がいよいよ深刻となっていた時に三男が米国において死去。百日を出でずして次男を神戸で失った。正蔵は家庭生活における彼の命ともいうべき二人の愛児を殆んど同時に失った。また、事業でも造船業は、不振のどん底にあった。事業の不振と家庭の不幸に悩み悶え、造船の業を続けることに光明を見失いかけた。倒産寸前という最悪の状態にまで追いつめられた。家庭の貧しさから、自分は十分に修学できなかった正蔵は、乳児のときに亡くなった長男への愛情もこめて、三男新次郎を慶応義塾を経て米国に留学させていた。正蔵夫妻は秀才な三男に親としての夢を託し、また勤勉な次男にも期待を

かけていた。しかしそれらの夢も消え去り、事業では不死鳥であった正蔵も、愛児を相次いで失った大きな衝撃のため、ついに病床に臥してしまった。

病床にあった正蔵は「兵庫造船局払い下げ」の公示があったと聞き、すぐさま病床で払い下げ願いをしたためた。払い下げを熱望するものの中には旧幕府の有力者が多く、正蔵のように町人の出であり、病身であり、「船気狂い」の世評のある者に払い下げられる可能性はきわめて希薄であった。正蔵が四十二才にして、はじめて東京築地に造船業を興して以来、「造船」ひと筋に生き、持てる総てのものを投入して経営に当った苦闘、また正蔵の誠実な人柄、などが重視され、閣議はついに多くの払い下げ願い人の中から正蔵を最資格者と決定した。正蔵の篤実な人柄と、仕事に精魂を傾け尽す情熱とは、ここによりやく正しい評価を勝ち得たのである。ここにたどりつくまでの二十五年間―それは「船造り」という悲願を背負って、茨の坂道を喘ぎながら登っていく荒野の開拓者であった。かくして明治二十年（一八八七）七月ついに正式に払い下げは確定した。

旧官営造船所の土地・家屋・施設の代価は、経営を続けて得る収益の中から五十ヶ年という長期間に年賦で払えばよかった。これは「官営事業を民間へ移殖させ、さらに育成させる」という明治政府の遠大な方針によるものであった。その設備は、これまでの川崎兵庫造船所に幾倍するものであり、造船能力も大きかった。

明治二十年「川崎造船所」と名付けたころ、全従業員は六百人を数え、事業の基礎は確立していたが、正蔵は「商戦は最初の五分間」を常に説き、百トン程度のランチの受注交渉にも、自らこれに当った。受注活動は常に積極的な態度で臨み、「ひと度び受注すれば、永久のお得意になっていただく」と、率先垂範、工事の指揮に当った。彼は設計が完全でなければ、立派な製品は生まれないとして、着工に先立つ事前の用意は慎重かつ周密をきわめた。着工するや受注品の納期厳守を操業上の鉄則

として奮闘した。明治二十六年（一八九三）に一部の工場が焼失したとき、大阪市の天満橋、天神橋、筑前橋などの橋梁、東京市の水道鉄管、そのほか、紡績会社のボイラなどを製作中であった。正蔵は鎮火後、火事場に全従業員を集めて、「火事を理由に同情にすがって受注品の納期を遅らせてはお得意に相済みない。いまの場合こそ『納期厳守』を貫くときである」と訴え、契約期日に完納の見込みのつくまでの二十日間あまりは、自ら工場に寝泊りして仕事に取り組んだ。全従業員が一九となり昼夜を分たぬ作業によって納期は一日も遅えなかった。納期厳守は作業上の「至上命令」であり、彼自らを律するモラルでもあった。明治二十七年（一八九四）八月、日清戦争の突発によって、正蔵は海軍の要請にもとずき、広島県宇品に臨時出張所を開設して、多くの軍船の修理、改造を行なった。一方神戸工場では、この年十二月までに水雷敷設艇六隻を建造したほか、さらに幾隻かの貨客船を建造するなど、時代の火照りの中で業績はいよいよあがった。

日清戦争のちの造船業界は異常の活況を呈し、海軍は巨艦、船主は巨船を、それぞれ建造する傾向に進んだ。この情勢に應ずるためには、川崎造船所は施設を大巾に拡充することが必要であった。これは是が非でもなさねばならぬ彼の焦眉の課題となったが、そのためには巨額の資金を要した。かくて彼は経営組織を改変することを決意し、明治二十九年（一八九六）十月十五日、株式会社川崎造船所に改組し、社長には少壮三十一才の松方幸次郎を迎えてこれに経営を託した。時に正蔵は六十才であった。川崎正蔵はこの日まで、いく度か死にも直面し、苦難をも乗り越え、きびしい風雪にもよく堪えてきた。六十才といえは、経営者として、いわば脂の乗りきった、円熟した年令であった。正蔵自身としては改組のちも社長として経営の首座につき、株式会社川崎造船所をいよいよ成長させる意欲はあった。しかし健康が昔のようではない。夫の身を案じて静養をすすめる妻の切なる願

いを容れ、ついに第一線から退いたのである。

そして乾ドック（現在の川崎重工神戸工場第一乾ドック）構築という、困難な課題を松方社長に引き継いだ。乾ドック構築のため、少なからぬ費用をかけて数年来地質調査を行ない、資金の調達ができれば着工し得るまでの結論を得ていた。松方社長は就任後、ただちに乾ドック構築に着工。乾ドック構築が始まるや、今も川崎家に家宝として伝わる不動明王の像に、敬けんな祈りをささげて、そのつづがない竣工を念じ、仕事を続けること三年。工事が暗礁に乗り上げたとき、正蔵翁は苦悩している松方社長の弱気を一矢に付し、「乾ドックの完成なくして、川崎の発展はない。社運を賭けてもやり遂げるように」と励ました。

第一線を退いてからは、年ごとに隆盛に向かう川崎造船を静かに眺めて、「日々是好日」の明け暮れであった。晩年の最大の喜びは明治三十二年（一八九九）、当時東宮であられた大正天皇が神戸市布引の自邸をお訪ねになり、また同四十四年（一九一）には当時皇后であられた昭憲皇太后が静岡県興津の別宅にお訪ねになって、親しく永年の労苦と貢献とをねぎらわれたことであった。

壮年のころから信仰の篤かった翁は、晩年、「老来、鹿兒島は遠く、しばしばの墓参りも叶わねば」といい、神戸市布引山に徳光院を建立して篤く先祖の霊を祀った。

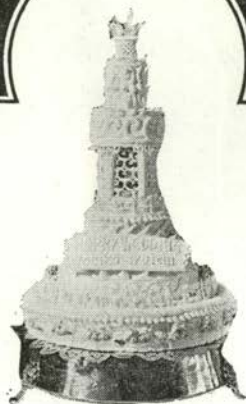
川崎正蔵は船造りのために生を享けたような人であった。そのためには生命を激しく燃焼させた。今日の全川崎は、九十年の昔時いた一粒の麦が、長い年月の試練を経て結実したものであるともいえる。巡洋戦艦「榛名」の進水を翌年にひかえた大正元年（一九一二）の冬、病ようやく重く病状革まるや浜る家人や医師を促がして、病体を川崎造船所を望見できる部屋へと移させた。

冬空をきいてそびえているガントリー・クレーンと、巨艦の建造にフル操業を続けている川崎造船所を遥かに眺めながら、この年十二月二日、船造りのために生きた川崎正蔵は七十六年の数奇な生涯を静かに閉じた。



晴れの日の

# ウェディングケーキ

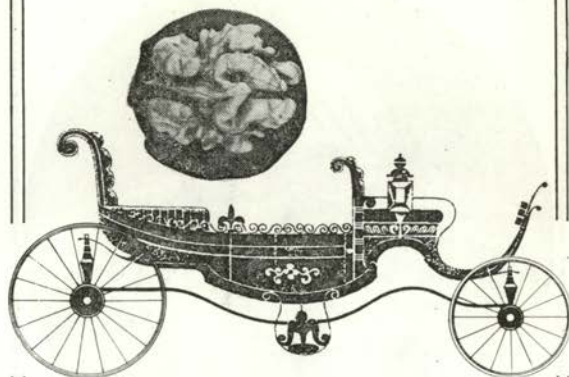


## 北欧の銘菓 ユーハイム コンフェクト

本社・工場 / 神戸熊内町1丁目 TEL22-1164・9865  
熊内店 / (市立美術館東隣)

三宮店 / 神戸三宮生田筋(階上喫茶室) TEL33-7343・0156・4314  
神戸デパート店 / 長田区大橋5丁目・甲子園店 / 国鉄甲子園口駅(北口)・芦屋店 / 国鉄芦屋駅前通・堂島営業所 / 大阪堂島中町ビル地階  
梅田店 / 大阪梅田地下センター・栄町店 / 名古屋栄町ビル地階・千種工場 / 名古屋千種区若水町・大丸店 / 神戸・京都・阪急店 / 神戸  
大阪・三越店 / 神戸・丸栄店 / 名古屋・オリエンタル中村 / 名古屋  
大阪国際空港・神戸鉄道弘済会・丸物店 / 豊橋・松菱店 / 津・姫路  
駅デパート・明石ステーションビル

## 粒よりの工芸品



この一粒に、すべてをかけた。チョコの名門  
〈ゴンチャロフ〉が、自信をもっておとどけする  
本格派の風味です——



チョコレート\*キャンデー

# ゴンチャロフ

神戸市生田区加納町4の1

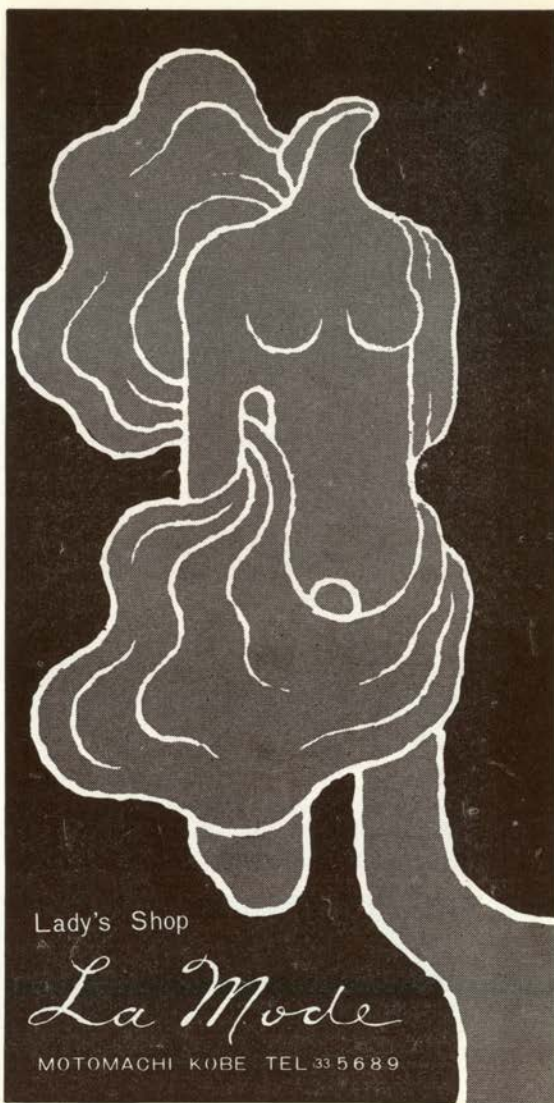
春のあなたを創る  
おしゃれな帽子！



マキシン帽子のおもめは  
全国有名百貨店でどうぞ

婦 人 帽 子  
**マキシン**

神戸・トアロード 東京・銀座3-2  
TEL (078) 33-6711-3 TEL (03) 535-5041



Lady's Shop

*La Mode*

MOTOMACHI KOBE TEL 33 5689